



## 高垣 愉佳

帰国してから、アメリカに行く前にはそれが当たり前だと思って生活していた様々な事が、当たり前を感じられなくなっていることに気づきました。こういうのを逆カルチャーショックとか、別の言い方をすると「出羽の守」とか「アメリカかぶれ」と呼ぶのかもしれないと思います。そして、海外から帰って来て、私みたいになる人は少なくないようです。だから、帰国子女や外国人に対する、カルチャーショックカウンセリングなんて分野も出来てきたのでしょう。

日本の歴史を振り返ってみると、「出羽の守」とか「〇〇かぶれ」のおかげで発展してきた側面もあるように思います。古くは日本には、今で言うところの「中国かぶれ」がたくさん居ました。中国から仏教を持ち帰った、最澄さんや空海さんなんかは、その最たるものかもしれません。そして、江戸時代には「オランダかぶれ」がたくさん居て、蘭学を導入し、カステラを焼きました。明治期にはありとあらゆる西洋に渡って帰ってくる「西洋かぶれ」がたくさん居ました。法律の分野ではドイツ方式を導入し、教育の分野ではフランス方式やアメリカ方式が導入され、今の日本の元となるシステムが作られました。こう考えると、「出羽の守」や「〇〇かぶれ」になる事は、もしかしたらずっと昔から日本人の十八番なのではないだろうか？そして、そのようになって帰ってきた私は、極めて日本人的とも言えるのかもしれないと思ったりし

ました。

というわけで、今回からは、渡米中に感じて記録していたものと、帰国後に感じて記録したものをセットでお届けしてみたいと思います。

## 見野 大介

みのだいすけ

陶芸工房 八鳥 hachi-dori

11 月末に私の師匠である岡本彰先生が登り窯を焚くので、手伝いに行きました。

登り窯は松割り木を燃料として 5 日間かけて焚くため、煤や煙の公害で京都市内では焚けなくなり、現在では珍しい存在になりつつあります。1000 束以上の松割り木を使って 1300℃近くまで上げていき、松割り木の状態、気候、窯の中へ配置する作品の大きさなどが炎の流れに影響し、様々な窯変が器に宿ります。温度が上がるにつれて炎の勢いは増し、その様は言葉に表せない神秘性があります。炎の流れ、松割り木の灰のかかり方で器一つの景色は全く異なり、それが登り窯の魅力です。



師匠は毎年 11 月に京都某所で登り窯を焚きます。見学自由ですので、興味あればお気軽に言ってください。案内いたします。



## 水野 スウ

今年は、とにかくよく動いた年でした。今も別府からもどったところ。20 数年前、原発の話で呼んでくれた人たちが、満 31 年の紅茶の時間のことも憲法のことも、話したいことを話に来て、と出前紅茶の場を用意してくれてたのです。

原発やら憲法やら、こういうめんどくさい？ことに関心をもちつつ、今さえよければいいじゃん、とは思わない人たちが、遠くの地にもいて再びまたつながれる。そのことが何よりうれしくて、7 時間の電車をのりついで金沢にもどってきました。

旅の道中、ここは軽やかだったのだけど、急に冷え込んだ数日前、防寒対策をちょっと手抜きしたな、と思ったら、もろ、腰に来て、イテテテ、、、の日々をすず羽目になり。その最中の別府行きだったので、ここと違って、足も腰もなんと重くて固くて痛いこと。

旅からもどって、紅茶つながりの親しい人たちの手で度々ほぐしてもらって、どうにか元にもどりつつあります。今日は、股関節の上にライアーを乗せたまま奏でてもらおう、というセラピーをはじめて体験しました。竖琴を鳴らす振動がこちよくからだにじかに響く、不思議な感覚でした。

痛んだ足腰のおかげで、魔法のやさしい手を持つ人たちが私のまわりにこんなにたくさんいるとわかって、心強いし、なんだか得した気分。いつか邪険にしたからだにはおおいに謝りつつ、ずいぶんがんばってくれてるんだよねえ、と何度もありがとを言いました。

## 早樫 一男

今年も残り少なくなり、来年の年賀状をどうするか考える時期になりました。あくまでも個人的な印象なのですが、喪中のハガキが例年になく多いような気がしています。個人的な印象というのは、85歳になる母と同居が背景にあるからかもしれません。

少し早いかもしれませんが、この一年間を振り返ってみると、少なくとも二つの大きな変化がありました。仕事が変わったこと

と母との同居です。来年はどのような変化が起こるのか、どのように変化するのか、今は皆目見当が付きません。少なくとも健康でいたいと願っている昨今です。これまでの人生、家族ともども健康で過ごせていることが何よりも嬉しいことだと痛感しています。

## 西川 友理

いくつかの学校で福祉系対人援助職養成にかかわっています。

寒くなってくると、学生のマスク率が上がります。

何年か前に、実習が近づくにつれ、徐々に大きなマスクをしてくる学生がいました。いわゆる伊達マスクというものです。彼女は実習1日目で実習先の職員から褒められ、翌日にはマスクを外して笑顔で過ごしていました。素直な奴め。

そういえば一時期よりも「伊達マスク」の学生は減りました。ピーク時は、もう教室の4分の1がマスクをしていましたから、あれは一時期のはやりだったのでしょうか。

伊達マスクをやめる決意をすることを、「マスク断ち」というらしいです。そんな決意があるものなんですね。

伊達マスクが徐々に減ってきている中で、「マスク断ち」できず、今でも伊達マスクをしている学生は、何かのメッセージを発しているように思えて気になります。今年もたぶん、マスクっ子が発生すると思います。

## 中島 弘美

カウンセリングオフィス中島の中に、研修センターの部門を立ち上げました。今後は、オフィスにいて家族面接やカウンセリングをしつつ、外部に出かけて行き、ワークショップや連続セミナーを開催していきます。

これまで私のカウンセリングの授業や社会福祉援助技術の講義を受講した学生さんたちが、卒業後どうやって学んでいるのだろう、仕事をしていて困ることがあるのではないかとつねづね気になっていました。それに加えて、新卒者の人た

ちが、日々たくたになりながら一生懸命仕事をしている姿をスーパーバイズにおいて目の当たりにしたのです。それならば、新人さんたちに学ぶ機会を提供しようという思いから計画を立てました。

まず、家族コミュニケーション講座がスタートしました。そして、現在事例中心のワークショップ内容を検討中で、新人さんに限らず、対人支援者のスキルアップをサポートしていきたいと思っています。対人援助学会のホームページでご案内できるよう、準備しています！

## 浦田雅夫

いろいろな課題(宿題、お仕事)が山積み、周りの皆さんにご迷惑をおかけすることが多くなってきました。申し訳ございません。しかし、あと少しで今年も終わりですね。心機一転、頑張らねばと思っています。今年、お世話になったみなさま。来年もどうぞよろしく願いいたします。あー1年のなんと早いことよ。



## 木村 晃子

～ゼロ地点そのゼロ@ゆうばり～長男の一人暮らし

この春大学に進学した長男が、9月末をもって大学を辞めた。実質8月から登校せず、1か月間自分のこれからを考えていた。友人や諸先輩たちにも相談しながら、最終的には自分で道を決断。希望する職場への就職が叶い、新たな職場の方々の配慮のもと、ゆうばりという地に引っ越して行った。いずれ巣立ちの時は来るわけだし、もう十分その時期であることから、母親としてさみしさというよりは、息

子の前途を祈るだけだった。

慌ただしくもあり、さほど経済的にゆとりがあるわけでない中で息子の巣立ち。その準備は周辺の人たちに随分支えられた。冷蔵庫、洗濯機、ガスコンロ、電子レンジ、炊飯器、布団、タンス、食器棚。これらは、すべておさがりでそろえることができた。

車の免許もないから、移動に不便な田舎では、職場のすぐ隣の公営住宅に入居できるようにも配慮された。コンビニまでも、ややしばらく距離がある。自宅には風呂はない。温泉に通うにも距離がある。自転車を貸してもらえたのが助けになっているらしい。

朝、出勤して、すっかり日が暮れてからの終業。帰宅してもテレビがない。すぐに、居間の中央に布団を敷き寝転がる。電波がなかなかキャッチできず、スマホすら使い勝手がイマイチ。そんな毎日の生活の中でも、不平不満なく過ごしているのは、周囲の人の温かい心のそばに置いてもらっているから。お惣菜を持たせてくれたり、家庭に招いて食事をとらせてくれたり・・・それが、祖母母くらいの年齢の人がしてくれるらしい。食わず嫌いの傾向だった息子が「なんでも食べられるようになった。」と自信に満ちた顔で言っていたのが印象的だった。

食料を届けに下の妹たちと息子のところへ行くと、「星がきれいだから見に行こう！」と妹たちを誘って外へ出て行った。

親が見せられなかった風景。そして人のぬくもり。ゼロ地点には、ゆうばりの夜空に輝くばかりの希望の光があるのだろう。

真っ暗闇に輝く星の美しさを感じられる人であることに、ちょっと母としての喜びを感じる。

北海道 当別町 普段はケアマネジャーとして高齢者支援をしています。

## 藤 信子

9月に盛岡に行った時に「紅ロマン」というりんごを初めて食べた。シャキシャキした食感と程よい酸味が美味しくて、10月に盛岡に行った時に、紅ロマンを果物屋さ

んに頼んだら「もう時期が過ぎて、今が違う種類になりました」と言われ、いろいろ味見して「早生ふじ」を買った。りんごの種類によって、収穫時期が違うということを今更のように知った。確かに数年前から、秋のはじめの頃に売られている「秋映」という長野産のものが気に入って、その時期になると買おうと思うけれど、買える時期がとても短い品種だということを経験したことを思い出した。日本のりんごの品種が多くてこうなるのだろうか、日本の果物は品種改良が進んでいるから…。この頃のリんごは大きいので、一人で食べきれない、という話もでた。品種が多くて、お菓子のよういろいろなで…。いいのか悪いのか…。おいしいりんごを食べながら考えた。



## 中村 周平

私事ですが、今年8月に引越しをしました。同居しておりました祖父と犬が昨夏に亡くなり、一人で住んでいくには広すぎる空間になっておりました。祖父たちの気配や雰囲気が残るこの空間に居たいという気持ちはもちろんありましたが、「やはり、いずれはここも出なくては」と思うように。いつまでもいることで、変わらないことへの安心感を得ようとしている間違っただ自分に気づいたからでした。ただ、バリアフリーで一定のスペース(介護用ベッドが置ける、浴室に一定の広さがある等)が確保されている賃貸物件もなかなか見つからないのが現状です。そんな中、お世話になっている介護事業所で、あらたにバリアフリー住宅のサービスを始められると耳にし見学に伺いました。立地条件、住居スぺ

ース、自分の理想に近い物件でした。そして、かなりこちらの無理を聞いていただき、引越しをさせていただくことが叶いました。生まれて初めての引越し(以前は両親に任せっきりで、今回初めて自分で段取りを…)は、わからないことだらけ、失敗の連続。人生の先輩であるヘルパーの方々にアドバイスをいただきながら、なんとか引越しを終えることができました。

## 浅田 英輔

最近、息子と一緒に音楽を聴いている。「前までは音楽きいてかっこいいとかだったけど、最近、歌詞の意味を考えるようになった」そうだ。12歳。このところ、RADWIMPS がお気に入り。王道は THE BLUE HEARTS だ。友達と iPod で YouTube で検索して聴いてるようだ。中学生の娘もそうだが、「CDを買う」という体験はまだない。欲しいと思わないそうだ。そりゃそうだ。検索すりゃだいたい出てくるからね。少年ジャンプも楽しみにしているが、「発売日を楽しみにする」というのもあまりない。ゲームソフトの発売日は楽しみなようだが、それでもそれほどの情熱はみえない。好きなアーティストのアルバムが出ることを心待ちにしていた時代はだいぶ昔になったようだ。「実物を持つ」ことへの喜びは、自分も含めて薄れてるんだろうなあ。



## 中村 正

ストーキングの被害がある。逗子市で女性が殺害された(2012年11月)。ストーカー被害が把握されていたにも関わらず事件を防止できなかったこと等、教訓化すべき課題がいくつかあり問題視されている。被害者の家族が加害者対策を強化すべきだとして研究会を組織した。それに関係している。さらに京都でおこったある殺人事件を情状鑑定して欲しいと請われて膨大な調書を読み始めた。一審判決の無期懲役は厳しいと考えた弁護人からの依

頼である。情状を斟酌した後も、そして被害を少なくするためにも、加害者へのアプローチが必要だという点では重なるものがある。兇相で面談する虐待親も、刑務所で出会う性犯罪者も、ハラスメントで処分された教師も、高齢者虐待で指弾される介護者も、暴力をとおして何かを解決しようとしている面がある。暴力はその人たちにとっての養分のようなものである。それに代わるものを入れ替えていく必要がある。そして共通していることは他罰的であることだ。さらにやっかいなことは、世の中にある暴力の多さであり、正義の暴力のやっかいさである。これは男性問題に視点がないとみえてこなかった。私も男性なのでやっかいだともいえる。研究しながら関わっているので、自殺であれ、殺人であれ、虐待であれ、その社会には一定の比率で社会病理が発現すること、その比率の乱高下こそが問題であり、それらをゼロにはできないという「冷めた目」をもつことになっているが、それでもやはり個々の事例にかかわるとそうは言っておれなくなる。とくに加害にかかわるケースをマネジメントすること、客観視するという研究姿勢を保持すること、興味本位に社会病理に関心を持つ学生に適切な教育を行うことの統合に苦勞する日々である。これらは現代社会そのもののテーマだと思う。自分の心身、意識、態度、関心に社会が表象されるので、それをこそ解読するようにと学生たちに伝えているが、それは自分自身にも跳ね返る言い方なのだろう。とにかくいろんなことが舞い込む日々である。

## 坊 隆史

去る11月23日、大阪市男女共同参画センターのクレオ大阪中央館にて「第1回全国男性相談研修会」が行われた。午後の分科会で登壇させて頂いて全国各地の行政担当者の情熱を感じた。決して目立たないけれど確実にニーズはある。本当に嬉しいことである。第2回研修会も実現できることを願っている。

## 松本 健輔

今回、大阪市男女共同参画センター主

催のイクメン写真コンテストでなんと準ブロンプリを頂いた。ただ、実際に自分がイクメンかと言われると素直にそうだとかなかなか言えない。カウンセリングの場で、「子どもと遊ぶ時間が人生の唯一の楽しみなんです」と答える男性によく出会う。彼らは本当に子育てを心の底から楽しんで生き甲斐にしている。彼らと自分を比べた時にどうだろう。

彼らが正しくて、自分が間違っているとも思わないし、逆に彼らが間違っていて、自分が正しいとも思わない。ただ、そんな父親を沢山知っているだけに、イクメンという言葉を貰うことに違和感が感じた。

カウンセリングルーム HummingBird 主宰  
<http://www.hummingbird-cr.com>

## 牛若 孝治

日本の選手たち、なぜ応援してくれたファンの人たちに対して、最初に「ありがとう」が言えないのか???

スポーツの国際試合で金メダルが取れなかったり、成績が奮わなかったり、あるいは予期せぬアクシデントに遭遇したりしたした場合に、日本の選手たちは、まるではんを押したように、コメントの中に、必ず次のような言葉が盛り込まれている。「応援してくれた皆さんに(あるいはご迷惑をおかけして)申し訳ありませんでした」。私はいつもこの「申し訳ありませんでした」という言葉に違和感を覚える。なぜなら、金メダルを取れなかったり、成績が思うように奮わなかったり、予期せぬアクシデントに遭遇した、ということは、選手たちが思ったような試合運びができなかった、ということで、本来なら「悔しい」はずだからだ。それを、「申し訳ない」という言葉で覆い隠していることが、私からすると、不自然に感じるのである。

そしてもう一つ。「申し訳ない」という前に、自分たちを応援してくれたファンの人たちに対して、「ありがとう」と言うのが先であろう。なぜ、「ありがとう」を先に言わずに、「申し訳ない」という言葉が先に出るのか、この辺りも私からすると非常に不可解である。こんな不可解さを感じているのは私だけだろうか？

## 袴田 洋子

12年間、ひとりでやってきたケアマネジャー事務所を9月末で閉鎖し、10月から知人と一緒に、新しくケアマネジャー事務所を開業いたしました。12年ぶりに、同じ部屋の中で、他人と一緒に仕事をする、という環境に身を置き、嬉しく、楽しく、悲しく、疲れています。コミュニケーショントラブルも、多発しています。そのたびに、何て自分は、やはりコミュニケーションがへたくそなのだろう、とげんなりします。でも、やめるわけにいかないの、何とか解決に向けて、努力をします。その積み重ね作業は、とても貴重な体験なのだと思います。3人のケアマネジャー事務所のシステムが、うまく回り始めたかな、と思っているうちに、もうすぐ正月で、実家に行くわけですね。

## 団 遊

「社長、出前始めました」。社長とは、アソブロックの代表を務めるぼくのこと。アソブロック株式会社では、新しい就職活動のスタイル提案として「学生が社長を呼び出す」という企画を始めました。会場の確保と、5人以上仲間を集めることができれば、全国どこへでも、ぼくが出向いて話します。場所は学食でOK。友達も、1人真剣な子がいれば、5人くらいは付き合ってくれるのではないのでしょうか。もちろん無料です。

この企画は実験的試みとして1年間やってみようと思っています。世の多くの中小企業は、なかなか優秀な大学生を採用することができません。この実験的試みがうまく行きそうであれば、採用に意欲的な多くの中小企業社長が使えるプラットフォームとして形にできないものか、と考えています。



## 乾 明紀

11月末に町家に引っ越ししました。長らく誰も住んでいなかった東山区の小さな町

家を2年ほど前に購入したのですが、この度やっとリフォームが完了し住むことになりました。6ヶ月の赤ん坊を連れての引越しは大変でしたが、古い町家を取り壊さずリフォームできたことにとっても満足しています。

この町家は、昭和25年に新築として登記をされていますが、床下に防空壕があることからもっと以前に建てられたものなのかもしれません。本当に小さな町家ですが、そのサイズ感がとてもかわいくてあまりません(笑)。まだ工事がすべて完了しておらず、坪庭もこれからなのですが、しばらくは町家いじりが趣味になりそうです。



## サトウタツヤ

2014/11/30-12/6スイスとルクセンブルグに海外出張を敢行。

スイスではジュネーブでルソーの生家、ヌーシャテルではピアジェの生家を訪ねた。ルソーの生家は現在、博物館。彼が『告白』を書いたときには被害妄想的になっていたらしく、周囲からの迫害に対抗するためにあれだけどい自我が現れているらしい。近代自我の萌芽は、文章力と被害妄想の合作だと考えるとそれなりに納得がいく。

ルクセンブルグは神奈川県・佐賀県ほどの小ささだというけれど、そもそもこの国に行っても空港-ホテル-大学しか移動しないので、狭さの実感は(当然ながら)ない。

日常のワークから解放されるのはありがたいが、(遊びにきているわけではないので)常に英語で発表・講演・講義をする必要があり、自転車操業的な毎日で気が

休まらない。

海外に2週間以上滞在したことがないので、英語が流暢ということはないのだけれど、私(の考え)から何かをひきだそうとしてくれているので、何とかコミュニケーションが成り立っている気がする。言葉が流暢であるよりも、オリジナリティが求められているので、どうにか楽しくやれている。

今回はTEA(複線径路等至性アプローチ)だけでなくお小遣い研究についても話をする機会があり、中略、ルクセンブルグでは「ナラティブエコノミクス」という領域を作ろうということで盛り上がった。スイスでは「法と社会・文化的アプローチ」という研究プロジェクトと一緒にやろうという話もちあがった。身体は1つなんだけどなあと思いつつすべて快諾。みなさん、巻き込まれてくださ〜い!

Tatsuya Sato, Ph.D.

Dean, Research Division

Professor, Department of Psychology  
Ritsumeikan University

<http://www.arsvi.com/w/st11e.htm>

<http://www.arsvi.com/w/st11k.htm>

<http://www.psy.ritsumeikan.ac.jp/~satot/English/ENGvisit.html>

## 大野 睦

島でもすっかり冬モード。

沿道にはツワブキが満開になり、

奥岳には雪も積もりました。

この冬、早くも流行しているインフルエンザにもかかりました。

これから来る本格的な冬に向かって対策しないと...

ネイチャーガイド 有限会社ネイティブビジョン 代表取締役 屋久島青年会議所 副理事長 BLOG やくしまに暮らして

<http://mutsumi-ohno.seesaa.net/>

## 大石仁美

人生は冒険旅行 朝ドラ「マッサン」の中で、ヒロインの父親が亡くなる前に娘に言った言葉は印象的でした。そして彼女は、愛する人と共に荒波の航海に出発す

るわけですが、そこには想像を絶するような苦勞がいっぱい。それでも一度決めたことはやり遂げようとするひたむきさ。ヒロインの表情がとても素敵なので、はまっています。

やってもやらなくても時間は同じように流れていく。だったら、本当にやりたいと思ったことはやった方がいい。私はいつも自分にそう言い聞かせてきました。自分を振り返って、分岐点に立った時を思い出すと、ちょっと切なくなるけれど、失敗したと心から後悔したことはありません。

冒険は、何が起きるかそのワクワク感がたまりません。私は旅が好きですが、旅行会社のツアーにのったことは、ほとんどなく、自分で計画を立てることそのものが好きなのです。そして旅に出るといつも新しい発見が待っている。たとえば今、里芋の皮むきを終えたところですが、水を一杯張ったバケツの中で芋と芋をこすりあわせて皮をむくのです。こうすると、きれいに剥けて手がかゆくなりません。大野市で、小さな水車に芋を入れて、皮むきをしているのを見て、さすが里芋の産地!と土地の知恵に感動。それをまねてから、里芋の調理が億劫でなくなりました。旅はやっぱり楽しい!こんなささいな発見が嬉しいのです。

ちょっと走って、合間にスローライフを楽しむ。ベランダにつるした干し柿を眺めながら、(先日50個ほど干しました)ゆっくりに流れる時間に癒されています。

私の人生も冒険旅行。そして下り坂、幸せです。

## 村本邦子

今年のプロジェクトも来週の福島を残すのみとなった。プロジェクトの前後、今年一人であちこちに足を延ばし、これまでご縁のあった方々を訪ねて回った。みなさん、懐かしがって暖かく迎えてくださった。そして、さらに、新しい出会いが次々と広がった。ある意味で、このプロジェクトは出会いのための足場と捉えているが、4年目にして、それがどんどん実現していく手ごたえがある。

今月の岩手では、遠野で古民家に泊ま

って、遠野物語第99話を聴かせて頂き、大植の「風の電話」を訪ね、そこで陸前高田の素敵な人々と出会った。古くからの友人を介して、宮古でも新しい出会いがあり、今後、協働してくださる素敵なパートナーが見つかった。来週は、福島の仮設に泊まり、極久里珈琲(『山の珈琲屋 飯館「極久里」の記録』市澤秀耕+市澤美由紀参照)を訪ねる。あらためて東北の持つ土着の文化に学びながら、今、東北が面白くて仕方ない。暗い影が大きいのしかかる昨今、たくさんの小さくても大きな力とつながることで、踏ん張っていききたいものだ。

## 國友 万裕

今年は、対人援助学会の大会でシンポジウムをやらせていただきました。終わった後で、大学院の男子学生の人たちが話しかけてくれて嬉しかったです。興味をもってくれたみたいでした。これまでぼくは20年くらい、男性被害の問題を訴えてきたのですが、なかなか伝わらず、もどかしい思いをし続けました。今回の発表は、これまでで最も理解してもらえたものだったように思います。発表の機会を与えていただいたことに感謝しています。この発表をきっかけに男性被害の問題が日の目を見られることを祈るのみです。

大会で、ある会員の方が、生まれた曜日を当てることができる、その人の雰囲気は何曜日生まれかわかるという話をなさっていて、興味深く聞かせていただきました。ぼくは木曜日生まれです。木曜日とは1週間の真ん中ですから、一番エネルギーが最高潮に達しているときなのかもしれません。それにぼくは正午に生まれたと聞いています。そのことを他の人に話すと、「子供って、夜に生まれるケースが多いと思うけど、正午きっかりなんて希少価値だよね」と言われました。なるほど、正午というのもエネルギーを彷彿としますし、よい意味にとることはできますよね。

50になって、こういう発表ができるとは、俺の人生も捨てたものじゃありません。しかし、物事を悲しく考える習慣から抜け出すことはぼくには不可能なような気がします。そのことを友達に話すと、「國友さん

は、悲しみを味わっているときに、生きていくという気持ちになるんでしょう」と言われました(笑)。彼と限らず、友人たちからは、「ネガティブでなくなったら、あなたの持ち味がなくなる」としょっちゅう言われます。この厄介な性格もポジティブにとらえましょう。

今年人間関係に恵まれた年でした。今年ももう少しですね。さあ、来年はどういう出会いがあるのやら。

## 北村真也

京都府教育委員会認定フリースクール

「アウラ学びの森 知誠館」代表。

(<http://tiseikan.com>)

今年の秋は、前半で台風で翻弄されたかと思うと、一気に冬へと進んでいったような気がします。政治も経済も目まぐるしく動いているような感じを受けるのは、私だけなのでしょうか？

## 古川秀明

今回から新しい連載「講演会&ライブな日々」を書かせて頂きます。自由に好きなことを連載できる場所があるのはしあわせです。だけど自由に書けるだけに迷ったり悩んだりすることもあります。まず自分が楽しんで書きたいと思います。読んでくださる皆様に楽しんでいただければこんなうれしいことはありません。よろしく願い致します。

## 団士郎

### ◆年賀状話◆

あんなに熱心に楽しんで作成していた年賀状を、気がつくとき止めてしまっていた。去年は出さなかった。一昨年はどうだったか記憶にない。特別な理由や事情があったわけではなく、年末を迎える11月12月のスケジュールがハンパなく多忙で、結果的に年賀状のためにとる時間がない。

メール、メーリングリスト、facebook、ツイッター等なら、大晦日近くなっても送信可能だが、年賀状作成ほどの熱意は出てこない。それに、受け取ってもらえる人にもずれが生じる。年賀状だけのおつきあいだった方達はこぼれてしまう。

ともあれ、一ヶ月近く前から準備することが今の私には不可能という結果に過ぎないので、しばらくはこのままになりそうだ。

しかし私は、年賀状を無駄だとも虚礼だとも思っていない。毎年下さる数百通の方達のは嬉しく拝見している。近況などしたためた賀状は、喪中ハガキの10倍も楽しみだ。だから、私は出せませんが、年賀状を作成している人は下さい。

希に、もう年賀状は今年で止めますというメッセージの最終賀状をいただくが、このやり方を私は好きではない。世間のお互いの消息とは、そんな風にメリハリ付けるモノではなく、風の便りによると、亡くなったらしい・・・なんてのが良い。

「おや？どうしたのだろう」、「喪中だったかな？」、「去年は来てたっけ？」なんて、年に一度、正月だけのいい行事だ。



## 坂口 伊都

11月は、体調不良に悩まされる月でした。何が原因かはわかっていますが、ここまで自身にダメージが出るのだと驚いています。私の不調さと反対に我が家で暮らしているウサギは元気百倍です。9月に危篤状態になり、寝たきりで自分で餌を食べられなくて、もう寿命なのだろうと家族の誰もが思っていました。せめて水を飲ませてあげようと口元にスプーンで持っていくと飲むではありませんか。それならば、大好きなニンジンも口元に持って行くと、これも食べられたのです。こうして、ウサ

ギの介護をしていると起きられるようになりました。

まだ足は不自由でフラフラしていましたが、水も餌も自力で食べられるようになりました。いつまで、こうしてしてくれるかなと温かい眼差しで見つめます。弱っているのだから、大好きなレタスも少々高くても食べさせてあげようとあげていました。すると、どうでしょう。どんどん元気になって、私が小屋の前を通ると立ち上がり、野菜をちょうだいアピールまでできるまでになり、今では走り回ることもできるようになりました。危篤状態の時は、我が家のワンコがウサギ小屋の前で座り込んで見守り隊をしていたので、それも良かったのでしょうか。

今でも、高齢なのでいつ亡くなくてもおかしくないのですが、元気な姿を見せてくれることは嬉しい限りです。子どもを何回か出産している母ウサギなので、それも強さの要因かもしれません。この冬を乗り越えてくれればと願っています。そして、私の体調も復活したいものです。

## 河岸 由里子

両親がある集団に子どもを連れて入った。その集団では親子が一緒に住むことを許されないとかで、親から離されて生活した。両親は理想郷を求めてその集団に入ったのだろう。しかしその子どもにとってそれが理想の形だったのだろうか？答えは否である。その子どもは成長してとても不安定になっていた。理想郷であったなら、きっと幸せに成長し、精神面で安定していただろう。

そもそも理想郷などあろうはずもない。生きていれば苦しみも、辛さも、憎しみも、嫌なこともたくさん経験し、見聞きするだろう。誰もが、そこから逃げるのではなく、少しの良い事、小さな幸せ、楽しみ、そんなものを糧に生きている。子どもを道連れに心中するよりは逃げる方がましかもしれないが、いずれにしろ、子どもの意志は無視される。

離婚も同様だ。子どもは「別れないでほしい」と訴える。しかし父母は「一緒に居られないからどちらかを選べ」という。酷な

選択である。

家族を為し、家族を続ける事はとても努力のいることだ。「子は鎧」。子どものために、子どもを守るために、両親は努力する。それが、入信や入団と言う形になってしまったケース。何とも悲しい。

臨床心理士 北海道  
かうんせりんぐるうむ かかし 主宰

## 岡崎 正明

本誌の団編集長の著書『家族の練習問題』に、「迷惑」という題の話がある。

弱視の子とそのクラスの子達の話。YouTubeにもあるので観てもらいたいが、他人に迷惑をかけることと、人が繋がることの関係性が見事に描かれているお話しだ。

よく「1人で生きてる人間はいない」といったりするが、それはつまり皆なにかしら他者に世話になったり依存している、言いかえれば「迷惑をかけている」ということだろう。その意味で他人の迷惑にならずにこの社会を生きていくことは不可能に近い。

中学校の時、特別学級担当の先生が「『迷惑かけてたら友達になつてた』って、良い言葉だと思わんか」と嬉しそうに話していたのを思い出す。思えばその人も個性的でちょっとは迷惑なところのある人だった。だけどなぜか生徒に人気があった。

便利や気ままさが大事にされる昨今だが、どんなに快適なコンビニより、私たちが愛着を抱いたり、感情的に肩入れするのは、小汚い定食屋だったりする。海・山しかない故郷。放っておけない友人。何十年も優勝できない弱小球団…。私たちは、どこか迷惑が潜んでいるもの、欠点のあるものを愛さずにはいられない動物なのかもしれない。

高齢者の窓口で仕事をできるようになり、「ひとさまに迷惑をかけたくない」という言葉を聞く機会が増えた。ただ、深刻な処遇困難に陥るのは、誰にも迷惑かけずに生きてこれた方が多い気がしている。「無縁化」「未婚化」という最近よく聞く単語も、これと無関係ではないだろう。

自慢ではないが人よりも迷惑をかける

タイプに生まれた。そのおかげだろう、驚くほど周囲に恵まれてここまで来られている。ありがたいことだ。

これからも適度に迷惑をかけ、その分他人の迷惑を許容できる人でありたいと思う。

P. S ご意見・ご感想など受付けております。 buimen0412@yahoo.co.jp

## 三野 宏治

「連載を休みます。来年の3月に博士論文を提出します。この機会を逃すと提出機会がなくなります。(長く在籍してしまったため)博士論文の内容はマガジンに連載している「脱精神科病院」に関するもので、掲載していただいた文章をかなり使います。この短信は寄稿しようと考えております」



## 鶴谷 圭一

先週の土曜日(11/22)東京大学を会場に幼稚園、保育園のIT教育カンファレンス2015という会が開催され出席してきました。国内最大シェアの乳幼児向けアプリ制作会社、(株)スマートエデュケーションさんの主催により、幼稚園保育園経営者、保育士から幼児教育関連業者まで限定100名ほどが北海道から鹿児島まで全国から集まって3時間半ほどかけてカンファレンスを視聴した。スマートエデュケーションの成長は著しく2011年に起業して、もうトップシェアを担っている。ITの世界はほんとうにスピードが速い！僕らの仕事も何らかの影響を受け

ていくのだろう。そのことについてはもう少し調べて次回あたりに書きたいと思ってます。

原町幼稚園ホームページ

<http://www.haramachi-ki.jp>

メール osakana@haramachi-ki.jp

ツイッター haramachikinder

## 千葉 晃央

この時期は担当している行政の福祉職等研修のコーディネイトの仕事が少し目途が立ってくる頃です。先日、今年度の52研修7800時間のスケジュールリングが終了。もう私が担当して7年目なので5万4600時間を経過してきたことになる。

私がいるところは市と府があり、お互いにライバル関係という歴史があるとかないとか。この52研修は高齢、児童、障害、ホームレス、地域、対人援助、倫理、クレームなど援助にまつわる様々なテーマであり、そのテーマによっては法的にも府と市両方が日常的な連携を必要としている。単に会場屋さんの会場を手配するのではなく更生施設(ホームレス支援)、視覚障害者施設、聴覚言語障害施設、発達障害者支援施設、DV支援施設などで研修を行うよう工夫をしている。業務時間に実際にその場所を訪れて、その現場の方と「出会う」ことを大切にしてきた。行政のスタッフは人事異動のため約3年で異動してしまいが、民間の福祉施設の職員はそうではないことが多い。その地域にある安定した社会資源に利用者さんがたどりつくことができるように意図して企画している。ホームページや資料の字面からの情報だけではなく、あそこに行くにはこうやって行って、こんな人がいるから…とクライアントに話ができるようにしてもらえたら！という願いでやってきた。こうした狙いをわかってくださる先生も最近はおられて、私からではなく、「うちで来年やりませんか？」と先生から声をかけて頂けることも増えてきた。先日も市の研修を府の施設でやり、その研修で日常的に連携をする職員の方同士が相互に、意見、情報交換を行うことがあった。その後「あぁあの研修の時の…！」あの時伺った手順に改善させ

て頂きますね」というやり取りが研修後になされ、それがきっかけでその後のやり取りが改善されたそうだ。こういう話しが聞こえて来ると本当にうれしい。

専門資格ごとによる大量な義務研修、業務の効率化による非正規雇用の拡大、一人職場の増加による業務の負担増大という中で、研修をとりまく環境は厳しい。そんな中でさらなる研修は、もうすでに食傷傾向である。そんな世の中の動きに、一般企業の対応ははやい。JTB はオリエンテーリング、疑似小学校体験をする職場旅行を会社に提案している。国語の時間ではグループで俳句を作る、体育の時間では大縄跳びをする。不動産屋は土地の評価額をよくするために自分の物件の近くの会場での国際大会を誘致している。その国際大会は会社対抗スポーツ大会！社内運動会の現代版だ。様々な会社が会社対抗で勝敗を競う。先日、そんな様子をグループワープ、対人援助技術を生業にしてきた私は歯がゆい思いで見ている。なんといっても、参加したみんなが笑っている。生き生きとしている。笑顔が出る研修というような抽象的な言い方がいいのかはわからないが、そういうことを感じずにいられない対人援助職領域の閉塞感を感じる。学んだよろこび、時間を共有した喜び。それが何になるか、それがこの領域での功績にどのように貢献してきたのかを真剣に考えないといけない。

## 大川 聡子

9/24～25 に Teen Parent Support Conference という、若年で出産した親を支援する機関が集まった会議がニュージーランドの北部オークランドで初めて開催され、現地泊 2 日という弾丸ツアーで行ってきました。支援の方向性も、先住民(マオリ族や Pacific Islander)の特徴を踏まえた支援や、産後うつや禁煙など医療的ケアに特化していたり、母親・父親同士の仲間づくり、子どもの発達や育児支援に重きを置いた活動など多種多様で、支援の幅広さに驚きました。これらの多くが民間団体による活動でした(公的・民間機関から助成金や委託を受けていることも多いで

す)。

会議で会えた(元)ティーンズマザー・ファザーの皆さんも、博士だったり女優だったり実業家だったりグループを運営していたりと、パワフルでとても刺激を受けました。帰国して、日本の 10 代母親・父親のパワフルさを発揮できる環境を整えるために、何をどこから手を付けるべきなのか、日々試行錯誤しています。

## 大谷 多加志

今号で連載 10 回目です。とりあえず最初の目標までたどり着き、一つの山を越えた感慨があります。それに、18 号を書いたときは「もうネタ切れ！」と感じていたのですが、不思議なことに今はまだもう少し書きたいと思っていることがあります。継続は力なりとはよく言いますが、続けている中で、またさらに継続するための何かが生まれてくることを実感しています。

そして、今号からもう1つ、新しい連載を始めました。これまでの連載とテーマも違いますが、どうせなら見た目から違いを出そうと思って、拙いながらイラストなども入れました。ひそかに、上達を目指しています。

## 竹中 尚文

私たち夫婦にとって休日はほとんどありません。連休などは年に一回か二回です。私はこの一年間で、その連休をすべて長崎行きに使いました。長崎でもほとんど人の行かないような所へ行きました。傍らで妻が「携帯が通じない」と言いました。それはそうです、カクレキリスタンの所に行ったのです。隠れていたのですから、不便な所です。そこによく妻が付き合ってくれたことだと思います。本当に、感謝をしています。そうやって、今回の私の原稿ができました。カクレキリスタンの村まで行かなくても、本稿中に出てくる「大浦天主堂」「崇福寺第一峰門」「崇福寺大雄宝殿」は九州に五つある国宝建築物の内の三つです。長崎に行かれるときには、本稿をお伴いどうぞ。

浄土真宗本願寺派専光寺住職

## 川崎 二三彦

### リフォーム問題(4)迷走の果て

現在の児童虐待問題については、要保護児童対策地域協議会というネットワークを活用して対応するのが基本とされている。この協議会、制度が発足して今年で 10 年目となるが、全国的に見て、必ずしもうまく機能しているとはばかりは言えない。特に、児童虐待死亡事件などが発生すると、当該地域における要保護児童対策地域協議会等の取り組みが問題視され、「情報の共有はできていたのか」などと批判される。というのも、本協議会は、民間団体も含めて多くの機関が参加することを想定するとともに、これら全ての構成員に守秘義務を課すことで、情報共有を促しているからである。



翻って、我が家のリフォーム問題。幸いなことに、良心的で人のよい一級建築士が女性の視点で設計管理を担当し、やはり一級建築士の資格を持つ社長が営む工務店が工事を請け負ってくれたせいで、本格的に始まったリフォーム工事現場に足を運ぶと、それはまあ、仕事がきちんとしている。これなら阪神大震災並みの地震が来ても我が家は大丈夫、と安心し、感心しながら眺め回っていると、



「あれ？ ちょっと見て」

と妻が声をかける。リビングには、早くもすごく立派な掃き出し窓が入っている。

「一気に仕上がっているじゃないか」

「そうじゃなくて……」

「なんだい。これ、ペアガラスだろ。これからは冬の暖房費も節約できるぞ」

「そうじゃないの、よく見て。この窓、私たちが希望した大きさと違うんじゃない？」

と言われてよく見ると、以前の住居で使っていた掃き出し窓より、新しい間取りのほうが狭まっている。慌てて設計士に連絡した。

「えっ、そうですか？ すぐにでも現場見えますね」

などと応じてくれたものの、すったもんだの末、リフォーム最中の我が家は、リフォームのリフォーム。せっかくはめ込んだ窓を再び取り外し、作った壁面も一部をはがして新しい窓を埋め直したのである。

「一体、やり直しの費用は誰が持つんや」

などと呟いてもここは乗りかかった船、後に引くわけにはいかない。

結局、施主である我々と設計管理を司る一級建築士、及び実際に工事を行う工務店の情報共有ができていないのである。適宜適切な時期に三者集まって「個別ケース検討会議」を開催していればよかったのだが、何しろこっちは単身赴任の身。久方ぶりに現地へ赴いても後の祭りなのである。まことに「落ちこぼれ家庭」を標榜する我が家らしいリフォームの顛末と言えよう。

とは言いながらも工事は進展し、年末には再入居できる見込みである。ただし、遅れに遅れては現場に到着し、無理な注文

を繰り返す我々のせいでリフォーム工事は迷走を繰り返し、当初の予定に反して、再入居した段階でも完成していないところが残るらしい。

「いえ、生活するのに不自由はさせませんから」

と、工務店さんはおっしゃるが、では未完成となってしまうところはどこか。

ズバリ、それは「書斎」である。正月は我が家のどこかに、せめてPCを置くだけのスペースぐらいは見つけて、マイホームの中で肩身の狭い仮住まいをするしかなさそうだ。(つづく)

(2014/12/02 記)

## 荒木 晃子

毎年この時期は多忙だ。今年もご多分に漏れず、毎週のように週末大きな企画が待っている。対人援助学会では企画WSの開催。翌週末は、不妊当事者団体NPO法人Fine(ファイン)祭りin大阪スタッフ。そして、次の週半ばからは、月例出張で、島根県内田クリニックの心理カウンセリングと、年3回開催の松江家族WSを実施した。松江WSは今年で5年目となるが、毎回、団士郎教授を迎え、県下の(時には県外からも)医療・福祉・教育・心理士のみなさんと一緒に家族援助を学んでいる。加えて今月は、島根県行政の主催で「家族のかたちシンポジウム」を(立命館人間科学研究所との共催)企画し開催。準備段階から当日終了まで、興味深い内容満載だった。出し惜しむわけではないが、この模様は次回のおマガにご紹介したいと思う。

さて、休む間もなく来週は、日本生殖医学会(東京)に参加予定がある。先週末、島根県で開催した家族シンポは、実をいうと、足掛け5年目の筆者の研究構想を地方行政との共同で実現した。それを来週の学術集会で発表予定なのだ。国内の生殖医療関連の最も大きな学術集会で、児童相談所や乳児院との連携を研究発表するクリニックは、これまでもそうだったように、今年もおそらく内田クリニックだけだろう。ともすれば、「不妊患者が治療をやめて、養子縁組を考え始める」という、医

療機関(特に個人経営のクリニック)にとって、経営上何のメリットがないどころか、かえって、経営上のリスクがある筆者の取り組みに、内田昭弘院長は言う。

「私は医師として、生殖医療の限界を知っているからこそ、その必要があると思っています。不妊治療で妊娠する可能性は、幾つになっても0%にはならないが、かといって、100%の方が妊娠できるわけではない。どれだけ治療をしても、妊娠できない方が必ずおられる。私は患者さんが妊娠し無事赤ちゃんをもうけられることが一番うれしい。しかし、患者さんの中には、長年治療をいくらがんばっても妊娠できず、いつの間にか来られなくなった方がおられる。その方たちには、いまま申し訳なく思うのです」。

いえ、内田院長。申し訳なく、そしてありがたく思うのは、私や、不妊当事者の仲間たち。そして、施設で暮らす家族を必要としている子どもたちです。

以上